

特集

在校生へのメッセージ

～作業療法人生を振り返り、
自分を変えるきっかけや仕事で大切にしていること～

安藤 悠

社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団 総合リハビリテーションセンター 作業療法士

1. はじめに

「Generalist 広い分野で活躍する！」

この度、在校生のみなさんへのメッセージとして、本誌への執筆依頼を頂いた際、卒業アルバムを開いてみました。将来どんな作業療法士（以下、OT）になりたいか？の問いに対する私の回答です。果たしてそれは達成しているのでしょうか？

2005 年に入学し、ピカピカの校舎、新品の教材や福祉用具を使っていた頃を思い出します。卒業して就職し 14 年近い月日が流れました。今の状況やこれまで大切にしてきたことなど、この場を借りて、みなさんの少し未来の話をお伝えします。

2. 自己紹介

私は今、介護ロボットの開発・導入支援を仕事としています。

主な業務は介護ロボットの開発企業に対し、開発に向けたアドバイスや試作機の実証評価、共同での開発を行っています。また、介護ロボットを導入したい施設（介護事業所）に対し、取り組みたい課題に沿った機器の提案や導入に向けたアドバイス、運用方法の提案やそのための研修などを行っています。

職場は神戸市西区にある社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団 総合リハビリテーションセンター（以下、総合リハセンター）です。みなさんには「県リハ」「兵庫リハ」といった方が馴染みがあるかもしれません。

総合リハセンターには医学・社会・職業リハビリテーションや研修・研究、地域支援、パラスポーツ支援等の機能があり、多様な機能をもつ各部門が一体となって障害者や高齢者、その家族や地域を総合的に支援しています。（図 1）



図 1. 職場紹介（総合リハビリテーションセンター）

表 1. 職歴紹介

2009年 社会福祉法人 兵庫県社会福祉事業団 入職

配属年	配属先（勤務先施設）	経験したこと
2009年	リハビリテーション中央病院	大人から子供まで、様々な疾患に対する作業療法を経験
2015年	総合リハ訪問看護ステーション	在宅で生活される方への作業療法や施設の支援を経験
2019年	兵庫県地域リハビリテーション支援センター	地域リハビリテーションのシステム構築、行政と介護予防事業等の推進
2020年	福祉のまちづくり研究所	介護ロボットの開発支援、導入支援へ従事

※配属先はすべて総合リハビリテーションセンター内の施設

私の現在の所属は福祉のまちづくり研究所です。多様な施設がある総合リハセンターでは様々な施設に OT が働いており、人事異動でいろんな仕事を体験する機会があります。

入職時はリハビリテーション中央病院にて、回復期の臨床業務から始まり、切断や脊髄損傷、神経難病などの多様な疾患や小児リハビリテーションを経験しました。その後、訪問看護でのリハビリテーションや地域支援業務（介護予防など）、介護ロボットの開発・導入支援や研究、研修といった業務に従事してきました。様々な配属先（表 1）にて、OT として広範な分野の経験を積むことができていると感じています。

今の仕事では県や市の職員やエンジニア、企業の方、福祉機器メーカー、他施設の経営者や介護職員の方など幅広い業界の方と接する機会が多いです。そのため、専門用語が伝わらないことや共通の認識を持つことが難しいことを経験しています。OT としては少し特殊な仕事環境ですが、ここで生かされているのは学生時代に学んだ知識はもちろん、入職してからの知識や経験、失敗が自身の引き出しになっているからだと感じます。

日々大切にしていることはその人が何をしたいのか（目的にしているのか）、本質をとらえ、自身に何ができるかを考え続けることです。そうすることで、経験のない仕事に対しても試行錯誤し、前に進めることができていると感じています。

冒頭で述べた「Generalist」とは、広範な分野の知識・技術・経験をもつ人という意味があります。最近では、「Generalist」と呼ばれるための経験を得てきているのでは？と思えるようになってきました。

3. 自身を変えるきっかけ

私はとても優等生と言える学生ではありませんでした。学生時代を含め入職してからもたくさん失敗し、たくさん反省をしてきました。そんな私ですが、自身が変わるきっかけというものがいくつかありました。

その一つに学生時代の実習があります。今振り返ると、当時の私は卒業後の明確な目標を持っておらず、部活やバイトに明け暮れ、全力で遊んでいました。しかし、OT へのあこがれはありましたので、勉学にはまじめ？に取り組んでいました。

2 週間の評価実習で発達分野の臨床現場へ飛び込むことになりました。そこで、臨床現場で目の色が変わる（スイッチが入る）OT やそれに答え変化を見せる子供たちを目の当たりにし、本物の臨床というものを知りました。

「このままでは本物の OT にはなれない」と強烈に感じたことを今でも思い出します。

それ以来、OT になることの自覚が芽生え、試験や実習が単位をもらうためのものではなく、知識や技術を身に付け、あこがれの OT に近づくためのものとなりました。

きっかけは人それぞれです。

学校の先生のとある一言や、学友の変化に焦らされることかもしれません。

私のように学生時代に出会うかもしれませんし、働き始めたときに出会うかもしれません。

4. ある患者との出会い

(価値観を大きく変えた師)

「障害のある人々が我が師」

リハビリテーションの概念がまだ日本に定着していない時に、総合リハセンターの設立に奔走された澤村誠志先生の言葉です。(図2)

エビデンスに基づいた治療はとても重要な事ですが、入職してからも知識や経験値が圧倒的に足りません。それは仕方がないことだと思います。そんな中で作業療法とはいかなるものか、教えてくれるのは目の前にいる患者さんでした。

臨床3年目のころ、私の価値観を変えてくれた師を紹介します。

(本文および写真掲載に当たり本人および家族の了承を得ています)

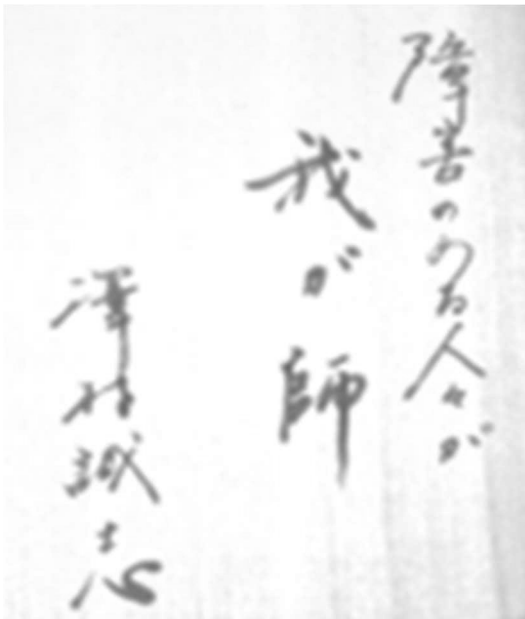


図2. 澤村先生の直筆サイン

ー絵をかきたいけど、もう描けないー

Aさん、80歳代女性、脳梗塞による右片麻痺（上下肢・手指 Br-stage V）、職業は画家、家族関係は良好で同居する長女、近隣に住む二女およびその家族からの協力も潤沢にありました。

「絵を描きたい」という表面上の言葉を受け取り、当時の私は右上肢の補助手としての使用は可能だが、物の操作は難しい、絵をかくなら左手だろうと考え、ADLや右上肢の訓練と並行して、利き手交換訓練を行っていました。

ある日、訓練室の個室で話がしたいと呼び出されました。

ー私は左手で絵を書きたいんじゃないー

私は病状と言葉から、その時の本当のニーズを受け取れず、Aさんと向き合えていなかったのかもしれない。

手を動かしながら、作業をしながらという余裕はなく、その日から話だけをする時間を設け、絵に対する思いや本当に描きたい絵、絵を描く環境など様々な思いを傾聴しました。また、家族とも話をする中で、退院後には個展を開くことを目標に左手で絵を描く練習を進めることとなりました。

絵が人生とともにあるとても心が豊かな人でした。

ー動いているものが描きたいの

人物画は気に入った人しか描かないわー

それから、訓練室や病棟をめぐりセラピストや看護師など、様々な人と交流する中で、絵を描く機会が増えて行きました。また、家族の希望もあり、強力なバックアップのもと病室でもスケッチブックを開くようになりました。

退院前、左手の文字は震えてしまう一方で、絵は何十枚にもなっていました。

ー何でこんなにきれいに描けるのですか？ー

ー絵はね、心で書くのよ、手じゃないのー

Aさんにとっての「人生を潤す作業」に向けて、自分の出来ることを考え抜いた結果でした。

(ADLを含めた身体機能面は先輩PTに本当に頑張ってもらいました)

退院後、一通の絵手紙が届く。

—個展をするので、是非いらしてください—

休日、個展へ行くと病前に描いた絵画が展示されていました。

とても鮮やかな絵を1枚1枚をじっくりと見て回り、出口が見えた最後の1枚、私はAさんが左手で絵画に挑戦し、丁寧に描き上げた1枚だと確信し、涙がでました。

そこには、私が訓練で見続けていた、左手で書いた震えたサインが記されていました。

—担当があなたで良かったわ

あの時、話をちゃんと聞いてくれて

ありがとう

右手では今まで通りには描けないけれど、
左手でも描いていける—

その言葉が、Aさんとの経験が、私の作業療法の根幹となっています。

それ以来、この人は障害を持って、この先どのように生活するのか？

どんな風に生きていきたいのか？

そのために今何をしないといけないのか？

目の前の病気や障害だけに目を向けるのではなく、人に向き合い、自身に何ができるかを考え続けることが習慣化したように感じます。



図3. 当時の私とAさんの笑顔

5. おわりに

「人間は考える葦である」

17世紀半ばに、フランスで活躍した科学者・思想家のパスカルの言葉です。(B.パスカル著・由木康訳『パンセ』白水社、1999年)

葦は水辺に育つ細く長い植物で、強い風が吹いたり水をかぶると、すぐに折れたり枯れたりする植物です。人間もこの葦のように非常に弱い存在ですが、人間は「考える」ということができます。非力である、だからこそ生きる力を身に付けなければならないことを知っています。考える事こそ人間に与えられた偉大な力だと思います。

私たちの仕事には、正解がありません。そして、常に better な選択を得るために考え続ける必要があります。

思考停止することなく、他者の言うことを鵜呑みにせず、自身の頭を働かせているか？

知識を詰め込むだけでなく、それをどのように使用するか考えているか？

自身および相対する方の目的は何か？また、それはどのように達成できるか？



図4. 私の宝物 (Aさんが描いた私)

将来、目の前にいる対象者は何を望み、我々には何ができるのか？

それらを考え続けることが大切だと思います。

最後に、作業療法士として働く中で、ふと思いつく先生の言葉や授業、学生時代の経験があります。今の自分だから、その言葉や授業の真の意味を理解でき、臨床と知識が結びつくことがあります。この文章を読んだみなさんもいつの日か同じように感じる瞬間があると思います。その時のために、今を大切に精一杯学んでください。